

## 第4回 科学隣接領域研究会（2017.4.11）

### 科学と倫理 –その1–

### 「研究倫理遵守のシステムの構築」



## 第4回科学隣接領域研究会について

日時：2017年4月11日（火）10：00～12：30

場所：日本科学協会会議室（東京都港区赤坂1-2-2 5F）

### 参加者（敬称略）

科学隣接領域研究会	リーダー	金子 務（大阪府立大学 名誉教授）
	サブリーダー	酒井 邦嘉（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
	メンバー	前野 隆司（慶應義塾大学大学院 SDM 研究科 委員長・教授）
	〃	植木 雅俊（NHK 文化センター 講師）
	〃	岡本 拓司（東京大学大学院総合文化研究科 准教授）
	〃	正木 晃（慶應義塾大学文学部 非常勤講師）
特別講師		廣野 喜幸（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
事務局	会長	大島 美恵子
	常務理事	中村 健治
	業務部マネージャー	石倉 康弘
	〃 スタッフ	豊田 悠也、堀籠 美枝子

### 資 料

- ・岡本先生資料 終戦時の国体の護持についての資料
- ・事務局資料 廣野喜幸先生のご紹介資料  
日本科学協会主催セミナー「木魂する科学とところ」パンフレット、参加申込書、広報計画  
『科学と宗教』出版計画（案）について

### 内 容

- ◆大島会長のご挨拶
- ◆金子先生のご挨拶

「科学と倫理」研究会をスタートするにあたり、以下の様にお話しされました。

- ・現在、第4次産業革命が展開していて、科学が置かれている状況がものすごい勢いで様変わりしており、「科学と倫理」の問題は、非常に幅広く奥深い問題を抱えているので、一番重要と思われる問題に絞り込んで討論していく予定である。（研究不正、STAP 細胞の問題、シンギュラリティ問題等）。
- ・日本科学協会が重点的に支援してきた若手研究者たちを厳しい状況が待ち構えている中で、研究者が持たなければならない倫理観や、どういうことに気を付けないといけないのかなど、適切な考え方が研究会から提示されることが望ましい。

- ◆研究会メンバーの発表「科学と倫理について」（各10分）

出席されている研究会メンバーは、それぞれ「科学と倫理について」というテーマで10分間程度発表し、最後に金子先生は、それぞれの先生の発表の中に含んでいる問題について以下の様に、まとめられました。

- ・岡本先生は国体問題。原爆という科学技術の産物が昭和天皇を頂点とする日本の国体を粉碎した、あるいは変えたという、科学と倫理の関係についてご指摘がありました。
- ・前野先生は技術者倫理ということ、すでにかかなりの時間をかけて教育の現場の中でも展開されていたということで、具体的な問題についていろいろとお話しいただきました。特に幸福学というのを聞いたときにはあまりピンと来なかったのですが、技術者倫理のいわば肯定的な側面を強調したものが幸福学なのだという設定らしいので、そうかなという感じで受けました。それも今後議論を深めていただけたらいいと思います。

※無断転載・複写はご遠慮ください。

- ・植木先生は、現代の科学技術の進展に対していろいろな側面から危惧をされていました。人間が生きて死ぬということが、まさに人間の人間たる一番の根本ですが、ロボットというのは不老不滅なので、永遠に生き続ける存在になるわけです。そういうものと生成消滅する人間が、どうやって共存していくのかというのはおそらく大問題だと思います。また軍事利用ということについても風刺的なお話がありました。
- ・正木先生は非常に多面的に、包括的にいろいろな問題についてご報告されました。宇宙に進出する人間の問題や、あるいは脳死臨調の死生観についての議論が、今どうして消えてしまっているのかということ、軍事研究というのが実は生命倫理にもかなり入り込んできている事について。また仏教独自の戒という問題について再検討する必要があるのではないかと、仏教的戒と 21 世紀の人類の倫理と、どう調和していくのかという問題があるのではないかとことです。
- ・酒井先生は特に研究者倫理ということに焦点を合わせて、ダーウィンの例から始まって、DNA のワトソン、クリックの発見問題にまつわる裏話も含めてお話でした。現在チーム研究というのが研究の主体になりつつあって、その場合のチーム間の人間関係と名誉、あるいはプライオリティーの問題をどう律したらいいのか。プライオリティー問題というのは、そもそも科学者社会が成立した 17 世紀当初から存在しているのです。僕は王立協会の問題で、それをずい分調べて書きました。これは科学研究自身の中にビルトインされている大変な問題なのです。プライオリティーを競わなかったら科学研究は成立するのかという問題もあるぐらいです。マートンというのは科学社会学の創始者ですが、マートンの言うところ、科学と、科学研究と、その成果と、ソフト研究費やノーベル賞をトップとするいろいろな賞の報奨システムがありますが、研究費と報奨制度がいわば科学研究の両輪の輪になって科学研究をぐるぐる回しているのだという見方があります。これはかなり楽観的な図式だったと思いますが、その中から実は、いろいろ大きな問題が露出しているということがあるのです。これは今後いろいろな問題を、多方面から検討してみたらいいのではないかと思います。

#### ◆廣野先生のご講義 「研究倫理遵守システムの構築」

第 1 回目となる「科学と倫理」研究会は、廣野喜幸先生（ご専門：科学史・科学論、科学技術倫理学）に研究者の倫理について、ご講義いただきました。先生は研究者の倫理問題を①研究不正 FFP（捏造・改竄・盗用）②インフォームドコンセント（説明を受け納得したうえでの同意）③製造物責任（研究ナイフ説）の 3 つに分類され、職業別の犯罪率、小保方事件や研究の軍事利用、アメリカでの対策などの事例でご説明され、問題提起されました。研究倫理はまだ公的なシステムになっておらず、研究不正を減らす為には、研究者の意識改革、どこまで不率を減らすかという合意形成、研究倫理教育、内部告発制度の整備などたくさんの課題があるという、若手研究者の人材育成を目指す研究会にとって重要なお話をしていただきました。

#### ◆事務局からの連絡

7/2 開催「木魂する科学とこころ」講演会について  
『科学と宗教』出版について  
次回の研究会日程について

以上